

生徒×先生×組合員で作った

奈良女子大学附属中等教育学校6年
小坂井 希実さん

オリジナル防災セット



1 オリジナル防災セットを作ろうと思ったきっかけはなんですか？

東日本大震災の復興支援を行う本校の有志団体「ならふく」での活動の中で、本校の防災備蓄品について考える機会があり、管理の不徹底に衝撃を受けました。そこで備蓄品の内容や備蓄の仕方について話し合い、災害が起こってから帰宅するまでの間に必要なものをまとめた「防災セット」を導入することを決めましたが、既製品の防災セットや帰宅セットは内容に納得がいかなかったり、値段が高すぎたりしたため、一から作ることにしました。

2 オリジナル防災セットにこれらの商品を選んだ理由

米粉クッキー・水

入学から卒業までのあいだ賞味期限が切れないよう7年保存の物を採用。アレルギーに配慮して食料には米粉クッキーを選びました。

くるくるトイレ

処理のしやすさが特徴の携帯トイレは、帰宅を想定したセットに最適だと考えました。また、学校全体で備蓄しているトイレもこの商品なので、一度説明しておけば使用方法などで混乱しなくて済むことも決め手の一つです。

サイコール

命の危険にさらされている状態では、声を出して助けを求めることは難しくても、笛を吹くことはできるということを知り必要だと思いました。サイコールは強く息を吹かなくても音がしっかりと鳴り、出る音も聞き取りやすい高さになっているので、この商品を選びました。



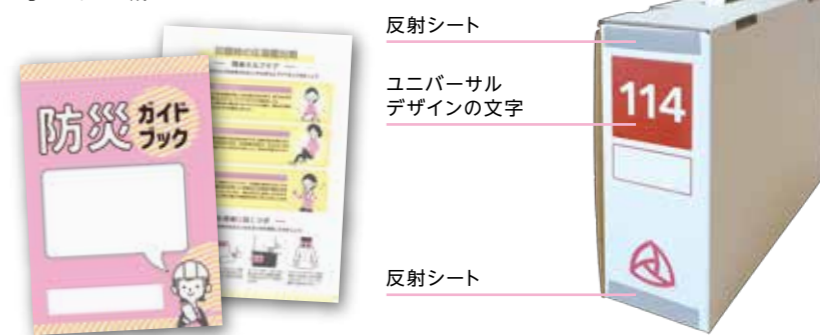
3 セットのこだわり

ガイドブック

もともとは女性用の防災ガイドブックでしたが、男女どちらも使えるように表紙や内容の一部を変更してもらいました。被災時に役立つ生理の知識については、読むことで女性の生理について理解を深めるきっかけになってほしいと考え、あえて残してもらいました。

箱のデザイン

どの学年の物がすぐにわかるよう、学年ごとに分けているスリッパの色と対応したステッカーに〇期生の数字を印刷し箱の側面に貼りました。数字はユニバーサルデザインの中から一番見やすいものを選びました。また、セットを保管する場所は災害時に暗くなってしまうことが予想されるので、反射シートを貼りました。



4 セットを作っていて思い出に残るストーリー

防災セットや、学校全体の防災備蓄品に入れる食料について何を揃えようかと話し合ったところ、実際に食べてみるとわからないという結論に至りました。そこで、先生や東洋理化学さんに相談し、昨年の夏休みに学校で非常食試食会を実施しました。事前にいただいていた防災・防犯カタログ「LIFE ZACK」から食べてみたいものを選び、30種類以上の非常食を東洋理化学様にご用意していただき、食べ比べて選ぶことができました。

5 セットを作るにあたり苦労したことは？

予算

防災セットは学校全体の防災備蓄品とは別枠のため、学校の予算とは別に各家庭がお金を出して買うこととなりました。保護者の方々の理解を得るためには値段を抑える必要がありましたが、内容について妥協はしたくなかったため、細かいところをかなり調整していただいて、できる限り値段を抑えたセットを作ることができました。

置き場所

提案当初は、生徒がそれぞれ自分の教室に置いて管理することを想定していましたが、かなり場所をとるため先生方から理解を得られませんでした。そこで妥協策として、半年前まで防災倉庫として使っていた体育館にある一室にまとめて管理することにしました。この管理方法が最善であるかは、生徒や先生方に今後もよく議論してほしいと思っています。

6 セットが完成した時どう思ったか？

防災セット制作は「防災教育の在り方と課題」というテーマで行った探究活動の中の一つでした。簡単に形あるものができるわけではないテーマだったため、防災セットという「もの」が実際に完成した時は特別な達成感を抱きました。一方、ここでお話ししたような経緯を知らない人たちが防災セットを受け取っても、防災意識の向上にはつながらず、取り組みが形骸化してしまうのではないかと危機感もあります。防災セットを配るときこそ防災意識を高める絶好のチャンスだと思うので、どのようにこのチャンスを活用するかは、自分もこれからの課題にしていきたいし、後輩や先生方にもよく考えてもらいたいと思います。

7 制作にあたり協力いただいた方、その方へのメッセージ

探究班のメンバー

毎週水曜日にある「探究II」の時間を使って防災セット、防災倉庫、防災教育について議論した仲間たち。「防災班」と呼ばれ、校長先生からも信頼を得て、学校の防災に関わる様々なことに関わりました。自分とは意見も視点も違う彼らの存在があったからこそ、いろいろなところに配慮した防災セットを作ることができたと思います。

梅川さん

生徒からも意見を出しやすい明るい雰囲気の方で、学校(生徒、先生)と企業(東洋理化学さん)が一体となって防災セットを作ることができました。〈梅川さんへのメッセージ〉防災セットの完成は「学校の防災」にとって決してゴールではありません。これから考え改善していかなくてはならないことが、防災セットにも防災倉庫にもたくさんあると思います。自分には継続が不可欠です。防災士でいらっしゃる梅川さんのお立場からも、今後ともご協力よろしくお祈りします。

8 読者へのメッセージ

学校は子どもが生きていくために必要な知識や経験を与える場所なので、防災においてもただ生徒の安全を守るだけではなく、災害大国日本で生きていくための、そしてより多くの命を守る人になるための「防災教育」をしてもらいたいです。そのために防災セットのように実物を目の前にして防災を考えられる取り組みは効果的だと思います。

防災担当教員のインタビュー 奈良女子大学附属中等教育学校 落葉 典雄先生

オリジナル防災セットを生徒に作ってもらおうと思ったきっかけを教えてください。

「探究II」の時間にこれに取り組んでおり、それなら生徒が内容や外箱なども考えればよいかと考えて、一緒に取り組むことにしました。

セットづくりに取り組む生徒たちを見てどう思いましたか？

セットに何を入れるかをグループで考えるワークショップを企画し、HRの時間を使って学年全体を動かしていく様子を見てすばらしいと思いました。

オリジナルのセットを作るに当たり学校側としての配慮はありましたか？

道は険しく、周囲の理解を得ることに労力や時間を要したのですが、校費で購入するのではなく、生徒が購入することに意味があると思いました。

そうすることで生徒もご家庭も自分ごととして捉えることができます。卒業後は持ち帰るので具体物があることで、防災意識を高めて持続できることや家族や地域に広げることができるかと思っています。

頑張った生徒たちに一言お願いします。

新たに持つことになったオリジナル防災セットは、生徒や家族、さらには各地域の防災意識の向上に役立ち、間接的に多くの人の命を救うことになると思います。自分たちがしたことに誇りを持ってください。特に、防災グッズ選びのワークショップの企画と防災HRの運営はすばらしかったです。

読者に向けてメッセージをお願いします。

予算や授業時間など、各学校で多くのハードルはあると思いますが、防災セットという具体物を伴った防災HRの実施は、とても意義のあることだと思います。また、ガイドブックを使って、避難所で生理の女性がづらい思いをしていることを例に、ジェンダー教育や、「目の見えない人が避難所に来たとき」というような具体例を出して、社会的弱者に思いやりを持つことなど、さまざまなHRの展開もできるかと思っています。

組合員コメント 有限会社東洋理化学 代表取締役社長 梅川 祐嗣さん

奈良女子大学附属中等教育学校様とのご商談は、防災・防犯カタログ「LIFEZACK」から、備蓄トイレ、水、防災食を納品させていただいたことが始まりでした。防災担当の先生は非常に高い意識をお持ちで、商談は全体を通してスムーズに進みました。学校備蓄品を納品する際に、先生より帰宅支援セットの話が別途進行していることを伺いました。LIFEZACKに掲載されているレスキュー3のような商品が良いと思い、ご提案させていただいた結果、防災担当の先生と生徒さんと一緒に箱のデザイン、商品内容、予算を決めて採用に至りました。皆さまの防災に対する意識が高く、セット作りに関わる中で、私も今まで以上のオリジナル防災セットを作りたいという気持ちが芽生えました。そして検討を重ね、できあがったセットはすばらしいものになったと思います。納品後、関わった先生や生徒さんにお会いして感想を伺いましたが、非常に気に入っていただけたとのことで、やりがいを感じることができました。後日、生徒さんからお礼の言葉と「そもそも防災には継続が不可欠です」という言葉をいただき、この言葉の重みを感じるとともに、今後も奈良女子大学附属中等教育学校の皆さまと共に帰宅支援の防災セットをアップグレードしていきたいと考えています。



梅川 祐嗣さん 小坂井 希実さん 落葉 典雄先生